魔法係長桜井秀子

高柳　総一郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法係長桜井秀子

【Ｎコード】
Ｎ７３５２Ｙ

【作者名】
高柳　総一郎

【あらすじ】
何もつかめなかった女の、最後に残った小さな希望の残り滓。
この物語は、桜井秀子という女が希望の残り滓から見つけた、大きな使命の物語。
（ｐｉｘｉｖでも同様の作品を投稿しています）

第一話『始動』

1

「係長、おはようございます」
自分より少々年上の部下が軽くお辞儀するのを見て、桜井秀子の一日は始まると言っていい。『六道商事企画課係長・桜井秀子』のネームプレートを立て、パソコンのスイッチを入れる。社内メールリストの受信箱は珍しく空だった。係長は他の平社員をまとめるという重要な役職だ、と個人的に秀子は思っている。当然、リーダーである自分にメールが来ていないという事は、それだけトラブルが起こらなかったという事の印だ。それは秀子にとって喜ばしい事であったし、同時に少しつまらない事でもあった。
基本、商品企画という仕事はそれをひねり出すのが大変なだけで、それを売るのは販促部や営業部の仕事だ。しかも、六道商事は文房具の一流メーカーとして日本に君臨する会社であり、特に油性マジックの国内シェアは四十パーセントを誇っている。もちろん、秀子もこの間まで新型ボールペンの企画・開発に携わっていたが、そんな事は非常に稀だ。大ベストセラーがある会社と言うのは――それが電化製品や食品を扱っているので無いなら尚更――その商品に頼り切ってしまうというのが普通だ。今回のボールペンでも、あまりよい顔をしてくれない上司を口説き落として着手したものだ。
まぁ、私に絶対の自信があったわけじゃないけれど。
キャリアウーマンというのは、ある程度の地位が無いといけないと秀子は考えている。何故なら、女性が職場に居続けることを快く思わない男性の上司が未だに居るのも事実であり、そういう上司は大抵いい人ぶって『早く結婚したらどうだ』と良いところのボンボン

を紹介したがったりする。それを断るには、会社が手放したくても手放せないほどの根を張る――つまり地位を手に入れなければならない。

だが、私は凡人だ。

パソコンから目を離し、メガネを取って目をこする。秀子は今年で三十四歳になった。だが、相変わらず同じ生活が続いている。上司に頭を下げ、部下を怒鳴り、会議をして、パソコンの前に座り、疲れたと思う暇も無く会社の人間と飲みに行く。たまにバッティングセンターに行って、あたりもしないのに部下や同僚の手前喜んで見たりする。大学をぎりぎりで出て、親のコネで何とか就職した会社で、毎日毎日同じ日々を過ごしている。

この前など、田舎の年老いた母がまたお見合いの話を持ってきた。この格差社会が進む日本で、自分より年収が上で、なおかつ自分を愛してくれるような男がどこに居るというのだろう。人生は短い。もう三十四歳だと言うのに、結婚しても、待っているのは老いだ。自分が愛した男に、そんな苦労はして貰いたくない。苦しむのは自分だけで良い。秀子はそう思っていた。

「係長、お茶とコーヒー、どちらにします？」

秀子は、コーヒーしか飲まない。十二年も勤めてここで同じ時を過ごしている秀子にとっての『現実』を知らない部下を見る。二十代くらいの、まだまだ自分は大学生です、と言いたそうな顔がそこにあった。三十四歳ですでに、眉間にナイフで切りつけたようなしわがある自分とは、随分と違っていた。しわひとつ無い美しい顔。可愛らしいえくぼ。仕事一筋で生きてきた秀子には、もはや何一つ残って無いものだった。

「係長、あのう……」

「コーヒーで良いわ」

羨ましかった。羨ましいあまり、彼女を見つめすぎたかもしれない。もしかしたら、嫌われてしまっただろうか。そんな事を考えている内に、デスクにはいつの間にかコーヒーが置いてあった。ご丁寧に、

白濁としたミルクが黒いコーヒーを侵食していた。
秀子はミルクが飲めなかった。

『――調べによると、男は意味不明な供述を繰り返しており――』
ＴＶのニュースでは、相変わらず同じような出来事が延々と流れている。秀子は、そんなニュースを聞き流しながら、喫茶店で昼食のフレンチトーストを食べていた。同じように昼食をとるような同僚は居ない。二年前に、同期入社の最後の子が結婚し、それきりだ。次の年の年賀状には、幸せそうなその子と、夫が笑顔で写っていた。
さっさと地球は滅亡しないのかしら。
秀子は元々温厚なほうだが、最近年のせいか少々愚痴っぽくなってきていた。そんな自分が、秀子はたまらなく嫌だった。核戦争による地球滅亡のシナリオを考え始めたころ、店の扉が軋むように開いた。会社に程近いこの小さな喫茶店は、最早レトロをとうの昔に通り過ぎているようなボロい店だ。秀子はここのあまり甘くないフレンチトーストが気に入っているためにここに来ているが、今の若い新入社員には物足りない店だし、レトロを愛する大人さえも寄り付きそうに無いボロさ加減で、ここの常連である秀子でさえ、何故つぶれないのかはなはだ疑問なくらい変な店なのだ。そんなこの喫茶店に客が来るというのは、一大事とも取れる出来事なのである。……肝心の老主人は、と言うと、あまり興味が無さそうにしてなかったりするのだが。
入ってきたのは、でっぷりと太った男だった。まだ5月だというのに、いまにもはちきれんばかりのＹシャツは汗染みが出来ており、手には少し水滴がしたたっているほど濡れているハンカチを持っていた。どこかのサラリーマンかと思っていると、いつの間にか秀子の前の席に座っている。空気が生暖かくなったような気がする。男の吐息の一つ一つがとにかく不快に感じられる。……そう感じないほうがおかしい。

「すみません、桜井秀子さんですよね？」
男が息を切らしながら話しかけてくる。別に走ってきたようにも思えない、。あまり関わりたくないが、目の前で話しかけられて無視する、と言うのも感じが悪い。しかも、よりによって自分の名前をフルネームで言っている。もしかしたら、取引先の人かもしれない。
「そ、そうですが……」
しかし、誰であったのか思い出せない。秀子は焦った。会社員と言うのは、マナーが最も問われる職業だ。もしこの男が何処かのお偉いさんだったりすれば、秀子に重大なダメージを与えてしまう可能性もある。一体誰なのだろう。
「本当ですか！？　いやぁ、良かった良かった。実は私、こういう者です」
男ははちきれそうなYシャツのポケットから、少しシワの入った名刺を取り出し、秀子に手渡した。それには『日本魔法少女協会スカウト部門チーフ・酒木原秀明』と印刷されていた。……秀子は、自分は少し疲れているのでは無いか、仕事の途中で居眠りして、夢を見ているのではないか、と思ってしまった。自分の頬をつねってみたが、痛かった。……現実だとすれば、『日本魔法少女協会』とは一体何なのだろう。少し前に流行った、メイドキッサなるものと同じようなものなのだろうか。秀子の頭の中で、まるでシャボン玉のように憶測が浮かんでは消えていったが、確信を得られるような答えは得られなかった。まず、メイドキッサなる所にスカウトされているのであれば、この酒木原と言う男は少々見当違いをしている。まず、秀子はそこまで美人ではない。しかも、眉間にナイフで傷つけたようなシワがある女に、
「いらっしゃいませご主人様」
などと言われて喜ぶ男が存在するのであろうか。たとえいたとしても、秀子はそんなところで働きたくは無い。
「どうやら貴女は勘違いしていらっしゃるようですね」
出されたおしぼりで色々なところを拭きつつ、酒木原は言った。

「スカウトと言っても、あくまでお話を聞いていただくことを前提としています。お嫌でしたら、断ってくださって結構です」
酒木原は出された水を一気に飲み干した。相当のどが乾いていたのだろう。さらに老主人におかわりを促した。
「スカウト……って言われても……。一体、何のスカウトなんですか？」
秀子は、氷が溶け切ってしまったコーヒーを飲んだ。水とコーヒーは、混ざるとやはり水が勝ってしまうようだ。それはすでに水に侵食されていた。
「魔法少女です。……プリントミスですかね？　書いてありませんか？」
「書いてありますよ」
「では、私が言いたい事も分かりますよね」
「分かりません」
即答だった。秀子は絶対そんな事分かりたくなかった。
「んー……分かりました分かりました。じゃあ、説明しましょう」
秀子は、もうここを立ち去ってしまいたかった。だが、お昼休みはまだ一時間近く残っている。どうやって理由をつければ良いのか、秀子には検討もつかなかった。
「要するに、桜井さんに魔法少女になっていただきたいんですよ」
「意味が分かりません。新手の風俗なら断ります」
「いえいえ、そんないかがわしい職業ではありません。……それにお言葉ですが、私が風俗を開くならもっとほかの人を使いますよ」
秀子が男をにらみつけると、さすがに言い過ぎたと思ったのか、とてもバツの悪そうな表情を作った。最も、手元ではいつの間にか運ばれてきたコーヒーに角砂糖を三個ほど突っ込んでいた。大して悪いとも思っていないのだろう。
「桜井さんは、小さいころアニメはご覧になっていましたか？　ほら、コンパクトを開いて呪文を唱えたり、ステッキを振って箒を乗り回すアレです」

「はぁ、まぁ人並みには」
「でしょう？……あ、すみません。私にも彼女と同じものをもらえますか？」
７０はゆうに超えているであろう老主人がよろよろとフレンチトーストを持ってくるのと同時に、再び酒木原が口を開いた。
「まぁ、魔法少女と一口に言っても、種類がたくさんありましてね。トラブル解決タイプ、純戦闘型徒手空拳タイプ、純戦闘型砲撃タイプ、医療従事タイプ・科学応用タイプ……数え切れないほどです。それだけ、魔法少女の需要が高いという事でしょう」
「はぁ。私は実際にそんな『魔法少女』なんて見た事無いですけど」
「それなんです！」
突然大声をあげた酒木原に、秀子は驚きのあまり危うくひっくり返ってしまうところだった。
「大声をあげてしまって申し訳ありません。ですが、桜井さんの言うとおりなんです」
「はぁ」
酒木原は、どうやらこの店のフレンチトーストが痛く気に入ってしまったらしい。老主人に今度はフレンチトーストを三枚頼むと、再び秀子の方に向き直った。
「女性であるあなたに話すのは少しためらいがあるのですが……。九十年代以降、女性の性の乱れはどんどん加速しています。ご存知ですね？」
秀子は最早あきれて物も言えず、とりあえずうなずいておいた。
「それに伴って、早くからそういう行為に及ぶ人が増え、我々が求める魔法少女の条件に合う女性はどんどん減りつつあるのです。魔法少女になるための第一条件は処女ですからね」
「帰っていいですか」
「お願いしますからもう少しだけ話を聞いてください。二十年前、全国に五千人居たはずの魔法少女は、いまではもう百人近くまで減ってしまっているのです」

「それで、私を魔法少女にしたいと。そういう事ですか？」
酒木原はしきりにうなずいた。秀子がようやく理解できたのが嬉しかったのか、首がちぎれんばかりにうなずいていた。
「お断りします」
酒木原の両眼が大きく見開かれた。……大方、まさか断られるとは思っていなかったのだろう。
「確かに、どう調べたのか分かりませんが、私はこの年までずっと処女です。……別に興味が無かったわけでも無いですし、機会が無かったわけでもありません。でも、そんなわけの分からない職業に就いて、今の生活を捨てるような真似はしたくありません」
言えた。秀子は心中自分を褒めたい気分だった。ここまで自分の言いたい事をはっきり言えたのも久しぶりのような気がした。だが、酒木原は笑っていた。あれだけはっきり断られたというのに。
「ほう、そうですか。いやいや、確かに貴女が言う事はほとんど本心のようですね」
「どういうことですか」
「貴女、一度で良いからドラマの主人公になりたいと思ったことはありませんか？」
「はぁ」
「ドラマの主人公は、それが喜劇でも悲劇でも、変化と刺激に満ちた生活を送っています。まぁ、主人公にとってはいい迷惑かもしれませんがね。しかし、貴女は今の変化の無さ過ぎる生活に、飽き飽きしているのではないんですか？」
「それとこれとは……」
「別だと言いたいんですか？」
確かに、図星だ。言い返す言葉も無い。
「大丈夫ですよ、桜井さん。今の会社を辞める必要なんかありません。それに、基本的には一年契約で更新性です。いやでしたら一年だけ頑張ってやめていただいて結構ですし、活動するのは夜だけです」

「どうして夜だけしか活動しないんですか？」
酒木原は鞄から書類を出しながら、こっちに目線を合わせずに答えた。
「魔物は夜にしか活動しないからです。大丈夫ですよ、桜井さんには十分な戦闘能力があるはずですから。……桜井さん、はんこか何かお持ちですか？　出来れば、銀行の届け出印がいいのですが」
「ちょ、ちょっと待ってください」
何も秀子は、そんな得体の知れない魔物などと戦うとは言っていない。確かに酒木原が言うとおり、日々の生活にはうんざりしている。毎日毎日同じようなループが続き、将来どうなるのか分からない。十二年間勤めてきた会社でも、いまだ係長だし、仕事を舐めている後輩や部下からは負け犬呼ばわりされているのを知らないわけではない。
「大体、私がそんな事をやって、なんのメリットがあるんですか？」
「もちろんあります。あなたが今勤めている会社で一生働いても得られないくらいの報酬をお支払いします。桜井さんは、結婚する気がおありじゃないんでしょう？」
「そ、それは……」
「隠さなくても、事前調査で確認済みです。老後は今のご時勢、おひとりじゃ大変ですよ？　厚生年金も出るでしょうが、結果的に貧乏で寂しい生活が待っているのは目に見えています。協会に一時でも所属すれば、老後の生活も委託業者の超高級老人ホームで暮らせます」
いくらなんでも胡散臭い……が、秀子は不思議とそちらの怪しさを疑うのでは無く、老後の暮らしの事を考えていた。秀子は、自分がすべて苦しめばいいと思っていた。周りの人間に迷惑をかけるのだけはごめんだからだ。だが、それは逆ではないだろうか。自分が苦しむ分だけ、周りの誰かも苦しむのではないのだろうか。どんなにつっぱっても、いつかは老人ホームやヘルパーに頼るときは来るのだろう。それを自分が苦しんでいると言い張るのは、愚かしい事だ。

実際に苦労しているのは、ほかでもない老人ホームの職員やヘルパーだし、彼らに頼っている事を『苦しんでいる』などと言うのは愚の骨頂だろう。それに、老人となった自分の周りに、誰が居るというのだ。親は死に、友人はロクにおらず、今まで同僚に冷たく接した自分に、誰が好き好んで一緒に居てくれるのだろう。そう考えると、秀子の心の中には、不安が洪水のように押し寄せてきた。

今はいい。会社と言う居場所があるから。だが、老後はどうなる？

「あの……桜井さん？」

酒木原は、いつの間にか三つ目のフレンチトーストを食べ終わっていた。

「何でもありません」

とりあえず話を聞いてみよう。確かにわけの分からない話である事は間違いない。だが、秀子はそれ以上に不安に駆られていた。

「一応、その魔物とかの説明をして欲しいんですけど……」

酒木原は驚いて、思わず口に運んでいたフレンチトーストを落としてしまった。

「ああ、そうか！　説明するのをすっかり忘れていましたよ。まず、魔物ですが、大した事はありません。人間の悪意が生み出す化け物ですが、やつらに大した知能は無いですし、桜井さんの能力の高さがあるなら、朝飯前でしょう」

秀子にはいまいち理解できなかった。この際、この男の話をすべて信じるとしても、秀子自身にそんな能力の高さがあるとは到底思えなかった。大学時代はラクロス部だったが、すでにその時の能力は失われている。何を根拠にそんな事を言うのだろう。

「実は、人間には潜在的に魔力があるんですよ。その力は年をとる毎に上昇し、大体二十歳前後でピークを迎えます。三十を越えた人間は、理論上際限なく魔力が上昇するのです。しかし、先ほど言った通り、童貞や処女で無くなると魔力は無くなってしまうのです」

「つまり、私はちょうど脂ののった旬の魔法少女ってことですか」

「言い方は悪いですが、まぁそういう事になりますね。……そう言

えば、まだ返答を聞いていませんが……。どうするんですか？　桜井さん。強制はしません。あなたの判断がすべてです」
秀子の心は意外にも揺れていた。老後を考えると、わけの分からない職業でも、ヘッドハンティングの一種だと思えばかなりおいしい。だが、この男の話が全て嘘だとしたら。自分がさっき言ったとおり、変な風俗で働かされるかもしれない。
「……分かりました。出来るかどうか分かりませんが、やらせて頂きます」
だが秀子は『今から』逃げたかった。現実から目を逸らしたいが、老後も見据えるという矛盾を孕んだ自分の欲望を満たしたかった。
「……分かりました。次は登録名なんですが……そうそう、流石に桜井さんくらいの女性が魔法『少女』と名乗るのはキツイですね」
「私も嫌です」
「桜井さんは確か……そうそう、係長でしたね。なら『魔法係長』でどうでしょう？」
「まぁ、別に『少女』以外なら……」
「そうですか。なら、魔法係長で登録しておきますね」
酒木原が契約書にそう書くのを見ながら、秀子はある種の恍惚感さえ感じていた。それが自分が決断できた事に対するものなのか、今まで安全な道を通って来たのを逸れた事への背徳感なのかは分からなかった。だが、この男が風俗の人間だろうと、人身売買のブローカーでも、魔法少女を集めていてもかまわなかった。秀子にとっては、その矛盾した欲望を満たす事だけが最も大切な事だったのだから。

「……以上で、説明は終わりです。何か質問はございますか？」
「いくつか質問しても良いですか？」
「どうぞ」
「まず、この武器は何なんですか」

秀子の目の前には、明らかに極めた人が持つような銃が置いてあった。今更ながら、秀子はとんでもない事に首を突っ込んでしまった、と悔やんでいる。
「違いますからね。勘違いしないでください。これは魔銃トカレフです」
「トカレフって言ってるじゃないですか」
「よく見てください。グリップ……って分かります？　そうそう、その握る部分です。そこには普通は銃弾を入れる弾倉があるんですが、無いでしょう？」
確かに、何も入っていない。それに、プラスチックのように軽い。
「弾は自身の魔力を込めますから、媒介さえあればなんら問題ないんです。昔はメルヘンチックで綺麗な色をしていたのですが、最近シックな色がブームですから。どうです？大人の魅力があふれ出ているでしょう？」
　むしろ青い服を着た国家権力の方々が惹きつけられそうな魅力があふれ出ている、と秀子は思ったが、あえて深く聞かない事にした。シックでないデザインの事を考えたら、気分が悪くなってきたからだ。
「もう一つだけ聞いても良いですか？」
「何なりとどうぞ」
「まさかとは思うんですけど……コスチュームとか」
「ありますよ」
秀子が言い終わるか終わらないうちに、ある意味一番肯定して欲しくない事実を肯定されてしまった。
「メイド・ゴスロリ・女子高生・少女風……。リクエストさえあれば、オーダーメイドでお作り……」
「じ、じゃあ目立たないスーツか何かを」
「しますが、桜井さんの場合、一年だけの勤務ですから、一からお作りするのはもったいないですね。協会のレンタル品を使いましょう」

一縷の望みが絶たれてしまった。……いや、待てよ。秀子は思い直した。酒木原はシックなデザインが流行っていると言った。ならば、コスチュームもシックなデザインが流行っていてもなんらおかしくないではないか。
「あのう、サンプル画像とかはあるんですか？」
酒木原はベルトが少しきつくて苦しいのか、少し顔をゆがめながら、腰のポケットから何とか携帯電話を取り出した。そして、秀子に画像を見せてくれた。赤を基調としたドレスのような作りで、動きやすくするためか少しスカートが短めになっている。胸には大きなリボンがあしらわれており、これも派手なオレンジ色をしている。袖口にはフリフリの素材が使われているようで、それを着ているサンプル画像の少女は、まるで携帯の中で踊っているようだった。
「……派手すぎませんか？」
「協会がスタンダードとして基準にしている、現在最高性能の魔法少女服ですよ？」
　そんな事は知らない。再び秀子は気分が悪くなった。脳内では、赤いフリフリのドレスを着て、右手に銃を握り、夜空を駆け回りながら化け物と戦う自分が居た。三十分前に自分で決めた事とは言え、あまりに軽率だった、と悔やまずには居られなかった。
「あと、移動手段なんですが、これになります」
酒木原が再びバッグをあさり、野球ボールほどの赤い水晶玉を七つ取り出し、テーブルに慎重に置いた。
「何ですか？これは……」
「宝玉です。これに魔力を込めると、桜井さんを乗せて飛べるようになります」
胡散臭い事この上ない。大体、魔法使いは箒に乗るものではないのか？秀子がそう訝っていると、酒木原が顔を覗き込んできた。
「ああ、もしかして箒を期待してましたか？」
「期待してたわけじゃあ無いですけど」
「昔は箒だったんですよ？　ですがホラ、上昇するときの衝撃で痔

になる人が続出しまして。おまけに、目立つんですよ。箒っていうのは」
確かに、あんな柄の細いものに乗りたくは無い。……秀子は、今日始めて酒木原の言う事に納得できたような気がした。
「さて、これで本当に私からの説明は終わりです。後ほど服をお届けしますから、メールの支持どおりに魔物を退治してください」
そう言うと、酒木原は立ち上がった。秀子が顔を上げると、そこにはもう誰も居なかった。テーブルには、フレンチトーストの皿が三枚とコーヒーの飲み残し、一万円札が置いてあった。

「係長、お帰りなさい。どこまで行ってたんです？」
年上の部下が笑みを浮かべながら話しかけてきた。秀子はそれを笑顔ではぐらかすと、再びデスクに座った。パソコンを立ち上げると、受信メールはやはりゼロだった。会社では、また延々と同じ日々が続くのだろう。不安が無いと言えば嘘になる。だが、秀子の中では、矛盾した欲望を満たした事の満足感の方が遥かに大きかった。酒木原から貰った道具を、デスクの引き出しの奥に閉った。
「あの……係長」
デスクの前に、今朝の女の子が立っていた。
「今朝はすいませんでした。私……係長がミルク嫌いなの知らなかったんです。本当にすいませんでした」
彼女の髪が揺れる。
「いいの」
「え？」
「いいのよ。怒ってないから。それより、コーヒー入れてくれない？」
彼女ははじめ目を丸くしたが、すぐに笑顔に戻り、またあのえくぼを見せてくれた。運ばれてきたコーヒーには、ミルクは入っていなかった。秀子が口に運ぶと、口の中にほのかな甘みが広がった。ど

うやら、また気を利かせて砂糖を入れてくれたらしい。秀子は、ブラック派だった。

第二話『争い』（前書き）

相入れぬ二人。相反する感情。思想。譲れない思いがそこにあるというのなら、闘争こそすべてを決するにふさわしい。それを無謀、野蛮と卑下し批判することは、たとえ神でも出来はしない。なぜなら、闘争は神が作った悪趣味なゲームなのだから。次回、『争い』。譲れぬ秀子の決意が大地をゆるがす。

第二話『争い』

2

「桜井君、どうかしたのかね」
企画課課長の大川が怪訝そうな顔で部下の顔を覗き込んだ。
「何かいいことでもあったのかね？　ずいぶんと嬉しそうだが」
「いえ、別に」
桜井秀子は、にやついていた顔をいつもの無愛想気味の顔に無理やり戻すと、再びパソコンのモニタに向かい始めた。実際、彼女は嬉しいのだ。彼女は、彼女の枷となっていた、サイクルから外れた。その事がたまらなく嬉しいのだ。もう自分は、周りとは違う。確実に頭一つ抜けたところにいる。その優越感がたまらない。モニタに移る彼女の顔は、やはり少しニヤけている。大川もまたこちらを怪訝そうに見ている。秀子は人とは違う。そんな小さな事実が、秀子の顔を落ち着かないものにさせていたのだ。
「係長、製造コストの見積もりが上がってきたんですが」
部下の報告に気づくのも数秒遅れる。秀子の脳内はまさしくお花畑状態であった。結局この日は普段ならしないようなミスを重ねる始末で、大川からの小言も右から左へ抜けていった。ふらふらとまだ夢見心地のようで、普段なら入るのに躊躇するような牛丼屋へ吸い込まれて行った。
「おや？　奇遇ですね」
見慣れた巨体に汗ばんだ顔の男がいると思ったら、案の定酒木原だった。普段の秀子であれば、彼を疎ましく思ったことだろう。夜八時過ぎに、いい年した女が牛丼屋でひとりでいるところなど、知り

合いには見られたくないものだ。
「酒木原さん。こんばんは」
自分でも少し声が上ずっている、と思った。おそらくこれから起こることに、自分自身期待しているのだろう。
「わかりますよ、お気持ちは。牛丼は老若男女、どうしても食べたくなる時があるものです」
酒木原が冷水がなみなみと入ったピッチャーから、次々と水をコップに入れ飲み干していく。彼がいかに今日も汗をたくさんかいたのかがよくわかる。
「ええ。普段は一人じゃ入れません。……正直、今夜が楽しみです」
「それは頼もしい限りです。今夜は初陣ですから、気負わずやってください」
店員が怒号に近い声で、酒木原の目の前に牛鮭定食を運んできた。酒木原は、味噌汁のわかめを食べおわると同時に、凄まじい勢いで牛丼をかきこみ始めた。
「先日送ったメールはご覧になりましたよね。遭遇ポイントでの魔物出現予定時刻は二時間後。レベルは三ですから、桜井さんにとってはむしろ格下、楽勝の部類に入るでしょう。我々サポートスタッフも現場にて待機してますので、ご安心を」
と、言うような事を酒木原は言ったようだった。半分は口の中の牛丼に阻まれ、聞こえなかったのだから、これが正確であるなら秀子の聴覚は鋭いほうだろう。
「報酬はどうなるんですか？　そういえば聞いてないんですが」
「契約書、読まれなかったんですか？　我々日本魔法少女協会では、年棒制を採用しています。我々の査定ですと、秀子さんの年棒は五千万となってます」
「五千万ですか！？」
予想外の破格であった。秀子が魔法少女などというふざけた仕事を引き受けたのには三つ訳がある。ひとつ。秀子は、酒木原の『老後の不安』という言葉に恐怖を覚えた事。ふたつ。秀子は、このまま

の退屈で単調な人生に飽いていた事。最後に、経済的にも豊かになると酒木原に言われたからである。
秀子は単なるサラリーマンである。経済的には一人暮らしで問題ない。だが、都内のマンションで寂しく過ごす今の生活に、何の魅力があるのだろう。何もない。今から結婚しても、たかが知れている。せめて老後くらい、豪勢に暮らしたいと思ったのだ。豪勢といっても、少し贅沢が出来ればいいと思っていた矢先にコレである。棚からぼた餅ということわざがよく似合うことだろう。
「ま、なんにしろ十分な報酬かと思います。……なんども言いますが、くれぐれも気負わずやってくださいね」
いつの間にか、牛鮭定食は空になっていた。本当に酒木原は食べるのが早い。彼の特技ともいえるのでは無いだろうか。
「それでは、遭遇ポイントで会いましょう」
酒木原は千円札を席に置き、去っていった。

薄暗い廃工場がそこに広がっていた。今回の遭遇ポイントは間違いなくここのはずだが、酒木原のいうサポートスタッフの姿は見当たらない。
「……『変身』」
秀子がぽつりと呟くとほぼ同時に、秀子は完全に『変身』を完了していた。燃えるようなオレンジ色のフリフリドレス。片手には持ってきた黒い銃『魔銃トカレフ』が握り締められている。
「……どこにいるのかしら」
つぶやいた声が拡声器を通したように響いた。同時に、雷鳴が轟くような音がした。今日は雨は降らないと朝の天気予報で言っていた。それに、さっきまで月が見えるほどきれいな夜だった。突然雷が鳴るわけがない。何事かと考え込んでいると、今度は非常に癪に障る

ような甲高い笑い声が工場中に響き渡った。
「ここで会ったが百年目！　情報通りにやってきやがったわね！」
甲高い。キンキン響く声は秀子の耳を塞ぎたいという欲求を満たすのに十分なものであった。女の声は反響に反響を重ねており、どこにいるのか分からない。
「私の私による私のための騎士！　あの女をやーっておしまい！」
再び響く甲高い声を合図にしたのか、地面が揺れ始めた。何かが来る。女のカンと言うべき物が、秀子がその場から突き動かした。案の定、地面が風呂桶の栓を抜いたように渦を巻き始め、その真ん中から何かが姿を現した。泥で出来た人型の何かが、先ほどの雷鳴と聞き間違うような咆哮をあげた。
「なんなのよ、もう！」
トカレフを構え、トリガーを引く。光線が泥人形を穿つ。雷鳴が轟く。だが、泥人形は動きを止めなかった。泥が、まるで間欠泉が噴出すようにせり上がり、泥人形がそれに腕を突っ込む。すると、泥で出来ているのかよく分からないが、棒状の物体が泥人形の腕に握られていた。
「あたしの『ロードナイト』はそんなもんじゃ無駄よ！　カリバーンを持ってしまったロードナイトを止められる魔物はいない！」
大体、人間が動かす魔物がいるなんて事があるのか。いや、酒木原は何度も『言っておかなくてはいけないもの』を忘れる事が多い男だ。『魔法少女が動かす魔物』が居てもおかしくないではないか。そんなことを考えているうちにも、カリバーンの一閃が迫る。泥のもつイメージから、鈍重かと思っていたが、とんでもない。鋭い一撃を確実に叩き込んでくる。もちろん、トカレフを何度も打ち込んではいる。だが、この魔銃トカレフの特徴として、連射すると威力が落ちるようなのだ。只でさえさっきの太い光線が聞かないのに、泥人形にしてみれば、蚊に刺される程度だろう。そもそも、この泥人形に痛覚が存在するのかさえ怪しい。
「どぉーしたのかしらぁ？　言っとくけど、降伏なんて許さないん

だから！」
オレンジのフリフリドレスのおかげで、身体能力も多少は向上している。だが、中身はこの前までごくごく普通の女だったのだ。百戦錬磨の戦士のようにはいかない。しかも、正確無比で叩き込まれるカリバーンのおかげで床は凹んでおり、くぼみのひとつに足をひっかけ、すっ転んでしまった。
「ぐっ……」
「魔物のくせに魔法少女の真似をするなんて、なかなか生意気ね。おっ死になさい！」
カリバーンが無情にも振り下ろされる。情け容赦ない死が迫っていた。思えば、短い人生だった。だが、秀子は思う。自分は何を成したのだろうと。人は一生をかけて、何かを成す。だが、自分は何を成したというのだ。富も、名声も、地位も、友情も、恋も、何一つ成していない。それで生きてきたと言えるのか？
じゃあ、このまま死ぬべきだろうか。カリバーンは、地面にめり込んだ。

お世辞にも美しいとはいえない、多少茶色になりつつある金髪をなびかせつつ、工場の奥から一人の女が姿を現した。ビビットピンクでレースのついたひらひらのドレスを着込み、手にはこれまたピンク色の杖のような物が握られている。
「さすがね、私のロードナイト。貴方は最高よ。ビューチフルよ。それでこそこのミッチー様の奴隷にふさわしいわ！」
ミッチー、と名乗る女は、甲高い笑い声を上げた。
「動くな！」
「動くな、といわれて動く人間なんていないわ」
ミッチーが後ろを振り向くと、恰幅のいい男と、黒い服を着込み、銃を持った数人の男が立っていた。

「あらぁ、久しぶりね、酒木原さん。聞いたわ、貴方出世したんですって？」
「そんな事は今関係ないですね。堀田三津子さん」
「私をその名前で呼ばないで！」
ミッチーこと三津子は、酒木原の言葉に態度を豹変させた。
「まさか、もう七人衆が動いたのですか」
三津子は答えない。
「一体何をするつもりなんです、七人衆は。これは明らかに契約違反ですよ。魔法少女同士が争うなど、絶対にしてはならないんです！」
「黙りなさいよ！　私が戦っているのは『魔法少女のフリをする魔物』よ。別に契約違反などではないわ」
「七人衆たる貴女が、そのようなわがままでは困ります」
「黙りなさい！　何が七人衆よ！　私は私よ。七人衆じゃない！」
泥人形が咆哮を上げる。カリバーンを再び振り上げ始めた。
「総員退避！」
酒木原達は万が一のため、常に最低限の武装をしている。だが、今回の魔物は低レベルとの報告を受けていた。魔法少女に対抗できる装備など、携行しているはずも無い。それほど、魔物と魔法少女には埋めがたい差が存在するのである。
「私は堀田じゃない！　三津子でもない！　これからは『魔法少女ミッチー』としてひとりで生きるの！」
カリバーンが酒木原たちに襲い掛かる。地面が穿たれる。酒木原たちはごくごく普通の一般人であるため、カリバーンの一撃などを食らえばひとたまりも無い。ひき肉になるのがオチだろう。
「この魔法少女ミッチー様が、宇宙で一番自由なの。誰の命令だって聞きはしないわ」
三津子のテンションはそれこそ最高潮に達している。酒木原は内心焦っていた。泥人形自体は、一般に『魔物』のカテゴリに入る。そもそも魔物とは、社会構造上発生する、感情の『カス』の塊だ。パ

ソコンが定期的にデータのクリーニングをしなければならないように、社会というひとつのシステム構造体は、『魔物』というカスを生む。現在の複雑な社会は、それだけ様々なタイプの魔物を出現させているのだ。今回、酒木原が『至極普通の』魔物だと判断したのが間違いだった。魔法少女の中には、自分が直接手を下すタイプのほかにも、いわゆる『召喚師』タイプが存在している。彼女たちは、いわば負の感情を人工的に爆発させ、それを構成物質として自分の僕を生み出すのである。堀田は、『召喚師』タイプの魔法少女としてかつて一線級の活躍をしていた女だ。ある事情により衰えてしまった今でも、魔法少女協会最大戦力の七人を示す、『七人衆』の一人に数え上げられている。それがこのように身勝手なことをされたのでは、サポート側としてはたまったものではない。

「チーフ、どうしますか？　堀田の魔力は桁違いです。しかも今の我々の装備では泥人形を突破して堀田を確保する事は難しいでしょう」

「そうですね。しかし我々がまずすべき事は、桜井さんの救出です。堀田をひきつけて、桜井さんの救出をすることだけを考えましょう」酒木原は冷静だった。ベテランの彼にとっては、予想範囲外の出来事などめったに起こりはしない。だが、今回は状況がまずい。まずすぎる。

（まさか桜井さんが押し負けるとは）

秀子が負けるという可能性を、正直酒木原はほとんど考えていなかった。いや、考えていないというのは流石に言い過ぎだったが、本当にこういう状況に陥るとは考えもしていなかったのだ。いくら魔力が高くても、経験が無ければ意味が無い。酒木原はそう考えた。買いかぶりすぎていたせいで、自分たちの慢心のせいで、秀子は恐らく命の危機に瀕している。それだけは確かな事なのだ。

「チーフ！　桜井さんはあっちです！　こちらで堀田を引き付けます！」

「三分あれば大丈夫です！お願いします！」

数人のスタッフが、携行している手榴弾のようなものを泥人形に向かって投げる。一般的な爆発を引き起こすものではなく、一種のブラックホールを発生させるものである。ブラックホールが引き寄せるものは、『魔物が纏う魔力』。魔物が『負の感情が変質したもの』であることはもはや周知の事実であろう。魔物は、その姿を維持するために、魔力をいわば皮膚のように纏い、自身の形が崩れないようにしているのである。魔物とほぼ同じ構造を持つ堀田の僕にも十分効果があるのだ。そうしてブラックホールは、泥人形の纏う魔力を引き寄せ、消滅させ始めた。絶大な効果とまではいかないだろうが、泥人形を引き付けるくらいは可能なはずだ。

「桜井さん！　起きてください！」

返事は無い。秀子が着ているものは、魔法少女協会の誇る最新型のスーツである。たとえダンプに轢かれようと、露出している頭に衝撃が無ければ、骨折すら防ぐ事ができる。とは言え、自分より五倍以上の大きさのある泥人形の一撃を食らったのだから、脳震盪くらいはおこしていても不思議ではない。魔法少女同士の戦いは、お互いの死を招くほど激しいのである。

「起きてください！」

「起きる前に殺ってやるわよ」

堀田の甲高い声が響く。時間切れだ。目の前には、泥人形がカリバーンを構えた状態で聳え立っていた。まさに絶体絶命である。

「完全なるトドメというヤツを刺させてもらうわ」

カリバーンが振り下ろされる。

流石の酒木原も、秀子を抱えて逃げる事は不可能に近い。秀子はともかく、自分が死を逃れる事は出来ない。死は経験できない。それは誰であっても例外ではない。酒木原は自らの死を覚悟することは出来なかったが、迫ってきている死を感じることは出来た。

何時間がたったのだろうか。永遠にも近い時間が過ぎたような気がしたが、酒木原はすぐにそれが間違いであったと確認する事が出来た。生きている。
「何もやっていない」
桜井秀子が立っていた。先ほど彼女の事を『買い被りすぎた』などと言った酒木原だったが、その発言をすぐに撤回しなければならない状況である。何故なら、彼女は魔銃トカレフを掲げ、それでカリバーンを受け止めているのである。いくらブラックホールで魔力を減らし、多少なりとも弱っている泥人形の一撃であったとしても、その重量まではどうにもならなかったはず。何よりも、彼女は先ほど死の一歩手前まで行ったはずなのだ。そんな彼女が、スーツによって『死ぬ事はない』事を分かっていたとしても、こうまでして堂々と攻撃を受け止め、立っていられるというのだろうか。
「私はまだ何もしていないんです」
「は、はぁ……」
「死ぬことは簡単です。諦めれば、多分死ぬんでしょう。でも私はまだ諦めたくない。だって私は、まだ何も成していないから」
堀田は愕然としていた。泥人形は間違いなく質量を持っている。トラックくらいは余裕で押しつぶせる。いくら素晴らしい耐久度や能力を持っていても、質量には勝てない。質量こそ力の全てなのだ。
「あんたはどうして潰れないの？　どうして？」
「話す必要はありません。私にも分りませんし」
「何だかよく分からないけど、貴女はこのミッチー様に喧嘩を売ってるようね……」
「それなら一生そう思ってればいいじゃないですか。知ってます？　嫉妬をする女は結婚出来ないそうですよ？」
「魔法少女にそんな事言ってもしょうがないと思うわよ？」
「少女って年でも無いでしょう？」
水を打ったような静寂がその場を支配した。酒木原は長年の感覚で、

この勝負が一瞬の元で決着がつくと直感した。秀子の雰囲気が違う。堀田も今までのふざけた態度を取ってはいない。両者とも、実力のある魔法少女であり、そんな二人が不器用ながら本気を出している。それがどれほどの物かは、酒木原には理解し得ない。ベテランのサポートスタッフとはいえ、魔法少女同士が本気を出して戦うとどのような事が起きるのかなど、理解の外にある。事例がほとんど無かったのだ。

「やっちゃいなさい！　ロードナイトォ！」

咆哮。雷鳴の轟くような咆哮。カリバーンが再び秀子を襲った。トカレフから太い閃光が放たれ、カリバーンを穿つ。砕く。泥人形には、それだけで反撃の手段は無い。カリバーンを復元するにも時間がかかる。　秀子の勝ちがほぼ確定した瞬間であった。

「ば、馬鹿な！　このミッチー様のロードナイトが！」

「大したことはないんですね、ロードナイトなんて大層な名前の割には」

宝玉を靴底に仕込み、魔力を足にありったけ込める。秀子はその反動によって宙に飛び出した。ほとんど無効化された泥人形などもう怖くは無い。堀田を守るものは、もう無い。城壁は崩れたのだ。

「桜井さん！　堀田を、本体を叩いて下さい！」

「分かりました！」

秀子は腕を引いた。宝玉の推進力と、スーツによる身体能力の向上で、パンチを放とうとしているのだ。堀田も魔法少女の端くれとはいえ、一般的な女性である事は間違いない。一撃入れることが出来れば、それで勝負は決する。

「あんたなんかに、このミッチー様は負けられないのよォ！」

堀田もまだ諦めてはいない。時間を稼げば、再びカリバーンを復元する時間も稼げる。まだ勝負は互角なのだ。秀子の拳が、堀田のステッキを叩く。

「やるわね」

「貴女こそ」

にやりと笑みが浮かぶ。考える事は二人とも一緒だった。堀田は秀子の拳をステッキで受け流し、秀子はトカレフで拳にあわせ、直撃を避けた。もちろん、二人は今日始めて出会うし、秀子にいたっては人生で初の殴り合いである。というか、人生でここまで本気で、しかも女性同士で殴りあう事などあるのだろうか？　だが、一つだけ確かなことがある。秀子は、高揚感を感じていた。拳を交える事によって、高揚感を感じるなんて、秀子には初めての経験であった。秀子は、堀田と殴り合いながら、自分の性癖はもしかしてサドなのかもしれない、などと冷静に考えていた。

「だけどねぇ、勝つのはこのミッチー様なのよ！」

堀田は持っていたステッキを秀子に向けて振り下ろした。トカレフで殴打を受け止めた秀子だったが、それが間違いだった。ステッキは折れ、トカレフは衝撃でトリガーが砕けてしまったのである。

「折れちゃいましたね」

「あんたのもね」

堀田は躊躇無く、拳を突き出した。綺麗な右ストレートが、秀子の鼻に決まる。今度はメガネのフレームが折れた。

「折れたわね」

「ええ。貴女の悪趣味なステッキより大切なメガネのフレームがね」

秀子は痛みを我慢しつつ、堀田の腹に拳をぶち込んだ。立っていられない。いつ食べたものかは知らないが、胃の中の物が吐しゃ物として、血と混じりながら堀田の口から流れ出した。いくらスーツが優秀でも、衝撃を完全に無くす事は不可能なのだ。ここまでくれば、秀子も容赦はしない。今度は腹に蹴りを入れる。身体能力が上がっているためか、堀田の体が多少浮いた。

「降参、しますか？」

「黙りなさいよ」

堀田はもう立っていられない。が、彼女の魔法少女としてのプライドが地に伏せる事を許さなかった。強引に大地を踏みしめ立ち上がる。

「やせ我慢にしか見えませんが」
「貴女、耳は大丈夫なの？　ミッチー様が黙ってろって言ったのよ？」
吐しゃ物と血で塗れたビビッドピンクのドレスのポケットに手を突っ込み、何か丸いものを取り出した。宝玉である。秀子の物と色も大きさもほぼ同じ。それを、手に握りこみ、拳を作る。
「私の顔にこれ以上傷なりなんなり作るわけにはいかないのよ」
「奇遇ですね、私も同じなんです。明日は朝一で会議があるんですよ」
秀子も同じように、宝玉を握り込む。今度こそ決着をつける。二人の女が考えている事は一緒であった。目の前にいるいちいちムカつくこの女をハッ倒す。秀子に至っては、当初の『アルバイト目的』から既に大きく脱線してしまっている。今は、目の前にいる堀田を殴り倒す事のみを考えている。人に頭を下げて生きるサラリーマンである普段の秀子なら考えられない事だ。
　そもそも世の中には、暴力で解決できる事というのは少ない。あるにはあるが、それは一般人にはどうしようも出来ない、『法』や『権力』などの社会機構に捕らわれているから起こる逃れ得ない事象なのである。だが、目の前のこれは捕らわれない。権力や法や金や上下関係、これらに一切関係ない。獣が子孫を残すための闘争のようなもの。人間もとどのつまりは獣である。獣が前に進むため、生きるため、闘争して何の問題があるのだろうか？　闘争は社会に捕らわれたりしないのだ
「正直言って、貴女なかなかやるわね。このミッチー様をここまで追い詰めるなんて」
「お褒めの言葉どうもありがとうございます。貴女みたいな勘違いに言われても嬉しくないですけど」
お互い拳を固め、引き、対峙する。
「引く気は無いのね？」
「その言葉、そっくりそのままお返しします」

弓から矢が発射されるように、拳が放たれた。二人の拳は綺麗に直線を描き、お互いの拳を捕らえる。廃工場には、風を切る音と硬い物がぶつかる音が響いていた。次第に二人の拳は血で染まり、腫れ上がってきつつあった。何度も言うようだが、彼女らはスーツを脱げば只の人間、生身で殴り合えば、拳のほうが悲鳴をあげる。そもそも、魔法少女は長く戦う事を想定されていないのである。ましてや、銃撃特化タイプの秀子や、召喚師タイプの堀田なら尚更である。二人は確実に消耗しつつあった。

「さっさと死になさい、このクソメガネが！」

「貴女のような厚化粧に引くわけにはいきません！」

秀子の赤い拳が堀田の顔を捕らえ、彼女を吹き飛ばす。柱が砕け、粉塵があがる。コンクリートに突き刺さった堀田の体は、それから動く事は無かった。

「私は、何かを成してみせる。負けるわけにはいかないんです」

突き上げた拳は、廃工場の屋根の隙間から照らされる月の光を浴びて、鮮やかに赤く光っていた。秀子は勝ったのだ。それは、変貌を遂げた彼女の最初の勝利であった。

第三話『七人衆』（前書き）

天使が祈り、鬼が泣く。天が轟き地が軋む。我ら魔法少女七人衆、地獄の底すら生ぬるい。我らに挑む愚か者、一人残らず滅ぶべし。我らと争い望む者、誰ひとりとして許しはせぬ。それこそ最強の証、最強の義務。次回、『七人衆』。力こそ、彼女達のすべて。

第三話『七人衆』

3

暗い部屋だった。かすかに洩れる光が、ブラインドの隙間からのぞいている他はひたすらに暗い部屋だった。魔法少女協会所属の魔法少女、『ダブルトリガー』の金剛地は、季節に変わりなく身につける長いトレンチコートの襟を立て直し、自分の席に着いた。丸い形のテーブルの中心には穴が開いていて、外側には七の椅子があった。内ポケットからラッキーストライクの箱を出し、タバコを一本咥え、火をつけようとすると、まるで夜明けのように部屋が明るくなった。

「コンさん。ここは禁煙スよ」

同僚の魔法少女の赤羽春子が、頭を掻きながら部屋の入り口に立っていた。女子高生の癖に、相も変わらず制服にフライトジャケットというミスマッチ極まりない服装だった。

「ケチケチいわないで欲しいね。私は来たくも無い会議に一番乗りしてるんだ。タバコぐらいいいだろ」

「君、それは間違いだよ」

女性にしては大柄な緋色が、赤羽の肩を持ち、押しのけて会議室に入ってきた。こちらも相変わらず巨女だ。しばらく会ってなかったから、多少は縮んでいたのではないかと金剛地は期待していたのだが、それはかなわぬ願いだったようだった。

「ルールだ。公共の場でタバコはご法度だ。喫煙所は会議室を出て右を突き当たりにいったところにある。そこで吸うといい」

緋色の慇懃無礼な物言いにイライラしたので、タバコに魔力を詰めて燃え上がらせることにした。汚い花火だ。魔法は感情を別のエネルギーにするものだ。感情がよどんだら、魔力も淀むのだ。イラ

イラしていなければ、タバコは綺麗な花火になったことだろう。
「それでいい」
初めに注意した赤羽より満足げに、緋色は腕を組んだ。巨女は例外なく巨乳だとでもいいたそうだった。スーツの上からでも分かるその脂肪の塊をもいでやろうか。二人が席についているのを観察しながら、金剛地裕子はタバコの代わりのスティック付のアメを取り出した。喫煙を始めて四年ほど経つが、ここ数年タバコは値上がりし通しで、禁煙も上手くいかないばかりだった。
「今日の議題ってなんスかね」
赤羽がかわいらしいクマのマスコットの付いた携帯をかちかちやりながら呟いた。金剛地は、『会議をするので集合してくれ』としか言われていなかった。段取りが悪いのはいつものことだが、いい加減学習してくれ、といいたくなる。
「おそらく、先日やられた堀田のことじゃないかしら……」
蚊が鳴くような声がしたかと思うと、巷でゴスロリ服と呼ばれている黒いフリルがシーザーサラダの上のチーズのようにまぶされているコスチュームに身を包んだ女が、赤羽のショートボブから除くうなじをなぞっていた。幽霊みたいな青白い細腕には黒いリストバンドがしてあった。左手には、赤羽のストラップと同じクマのぬいぐるみがあった。赤羽のと違うところといえば、必要以上に包帯でぐるぐる巻きにされていて、血がにじんでいるというところだが。
「な、なんスか！　いい加減にして下さいよ、江藤さん！」
「私たちの仲なのに、ひどいのね春ちゃん……」
江藤は赤羽を個人的にストーカーしている。最後に全員で顔を突き合わせたのは半年前だから、まだ懲りていないらしい。一度親も交えて金剛地が説教をしたことがあったのだが、江藤と赤羽は前世で心は結ばれながら、死別してしまった王子とお姫様だそうで、この世であったのは間違いなく運命なのだそうだ。金剛地はどちらがお姫様でどちらが王子様なのか聞きたくなったが、江藤の目は淀んでいて、聞けば三日は開放してくれなさそうなので止めた。

「大体、自分は江藤さんとそんな仲になった覚えはないっス！」
「江藤さん、なんて他人行儀よ。本当にひどいわ……。私の事は祥子姉さまって呼んでっていったじゃない……」
江藤の冷たい指先が赤羽の顎に触れたとき、会議室の扉が必要以上に大きな音を立てて開いた。三人の男女がカツカツ床を響かせていた。一人は魔法少女協会スカウト部門本部長の遠野命で、小脇にＡ４サイズの鞄を携えていた。ひょろりとした背の高いメガネをかけた男で、ちょうど緋色と同じくらいの背丈だった。もう二人は、そろいの小学校のものと思われる制服を着た少女二人で、こちらを省みることもせず、自分の席に座っていった。
「お待たせいたしました、皆さん。これから、七人衆会議を始めたいと思います。資料はお配りしますので、目を通していただけますか」
ぺらぺらと紙が空気を押し出す音をたてながら、Ａ４サイズの紙はドーナツを回っていった。紙には『協会規則違反魔法少女討伐任務のお知らせ』とプリントされており、ホチキスで右上が止めてあった。
「では、私が概要を説明させていただきます。先日、魔法少女協会七人衆に数え上げられる堀田美津子女史がやられました」
「死んだのか？」
にやにやと口の端を歪める金剛地を尻目に、遠野は気まずそうに紙に目を落とした。こちらも相変わらず煮え切らない野郎だ、と口にくわえたスティックを上下させる。金剛地の回りはむかつく奴しかいなかった。
「いえ、復帰はもうしてます。大事をとって安静にしているように指示していますがね。堀田さんは知ってのとおり、七人衆の中でも格下です。が、このままでは示しが付きません。よって、七人衆の皆さんで、ターゲットの始末をお願いします」
「ちょっと待ちたまえ」
相変わらず腕組みしたままの緋色が口を開いた。

「相手が魔物というなら本部長の言うことも理解できる。……が、どう見てもこの資料にのっているのは人間。我々は人間に仇なす魔物を退治するのが仕事であり至上命題のはず。われわれは人間を相手にする気はない」
なるほど、巨女にしてはまともな論理だった。それに、人間相手にどうしたら勝ちになるかなどあまり考えたくない。最悪、殺さなければならないだろう。
「そうっスよ。まるで自分たちがヤクザかなんかみたいっス」
すかさず赤羽も文句を挟んだ。実に不機嫌そうだ。尤も、その怒りの原因は自分の髪をくるくる指でこねくり回している江藤のせいかもしれないが。
「納得いただけないというなら、別に強制はしませんの」
甲高く、それでいて澄んだ声が会議室に響いた。七人衆最強にして、魔法少女協会の帝王の異名をとる“ホワイト・デビル”花井華乃その人であった。魔法少女としてのキャリアはまだわずか三ヶ月でありながら、魔物の討伐スコアや年棒もすでに歴代一位であるのだから恐れ入る。
「私と原野の二人がいれば、貴女方の手は借りませんの。もっと言えば足手まといですの」
「あ？　喧嘩売ってんのか、クソガキ」
思わず金剛地の声が荒くなる。元々血の気が多いたちなのだ。
「喧嘩だなんてとんでもありませんの。七人衆だなんて大層な名前をつけておきながら、なんの役にも立とうとしない貴女方に小言をいっておりますの」
金剛地の飴のスティックが天を衝き、右手を軽く上に上げたかと思うと、軽くゆれた。その瞬間、愛用の魔銃ベレッタ９２Ｆが飛び出し、手に収まっていた。銃口は花井の眉間に寸分違わず向けられている。
「おもしれえ、ぶっ殺してやるぜクソガキ」
「ストップっスよ、コンさん！」

赤羽が慌てて身を乗り出すが、昆布が絡みつくように江藤がそれを制した。
「あらあ、いいじゃないの……。やりたいようにやらせてあげれば？　私は春ちゃんさえいればなんだって良いもの」
赤羽はそんな江藤を振り払おうとするが、遅かった。金剛地のトリガーは二回も引かれ、赤い光線が銃口から飛び出す。轟音が鳴り響き、コンクリートの壁が崩れる音がした。『事故』では済まなそうだった。
「三流」
花井の声がする。
「私が本気でなくてよかった、と感謝したほうがいいですの。貴女、三回は死んでいますの」
金剛地が一筋汗を流した。もちろん、冷や汗だった。手ごたえはあった。だが、なぜ自分は花井の獲物を後頭部に突きつけられているのか？
「魔砲エクセリオン。ぶっ殺してやる、なんてレディが使う言葉ではありませんの。月まで吹っ飛ぶ衝撃をうけてみますの？　私は躊躇も後悔もしませんの」
何が月まで吹っ飛ぶ、だ。冷や汗を流しながら、金剛地は心の中で毒づいた。魔砲エクセリオンの射程距離は恒星間レベルである。撃たれて防御しても、体が残るかどうか分からないのだ。
「やってくれるぜ……。だが、三流ってのは気に入らんね。私はまがりなりにも一流を名乗るつもりなんだ」
「では、例の魔法少女を始末できるのですね」
原野が初めて喋った。その言葉は重かった。受ければ、自分は人殺しにならなくてはならない。金剛地にとってみれば、それはとても重い事実だった。
「もちろんだ。私は一流だからな」
その重い事実より勝るプライドを守るために、金剛地は首を縦に振った。

酒木原はコーヒーを一人すすっていた。秀子との待ち合わせに使う、さびれた喫茶店は、彼自身も気に入っていた。本来なら、秀子に対しての謝罪のみで済むはずだった。それだけで済めばよかった。

「一体何なんですか。緊急にお知らせしたいことって」

何時の間にやら、いつものグレーのパンツスーツ姿の秀子が立っていた。死にそうな店主にコーヒーを頼むと、席に着いた。

「まずは謝らなくてはなりません」

「だから」

若干いらいらしていた。秀子はプライベートでも関係なく、回りくどいのは嫌いなのだ。

「一体何なんです」

「七人衆が動き始めました。このままでは大変なことになります」

「その七人衆というのは？」

かちかちとコーヒーカップが鳴る。中で満ちている黒い水がゆれていた。

「端的に言えば、魔法少女協会の上位七人を指します。本来なら、協会本部からの依頼と我々サポートスタッフの補助によって魔法少女の業務は滞りなく行われていきます――が、七人衆は自分の判断で魔法少女として活動できるのです」

コーヒーはのどを燃やし尽くしながら通っていった。相変わらず話がまわりくどいし説明くさい。秀子としては、もっとコンパクトに要点をまとめて欲しい。そんな想いも、コーヒーは胃の底まで流していってくれた。

「その七人衆が、私とどんな関係があるんです」

「桜井さんが倒した堀田という魔法少女は、七人衆の一人『ナイトオブラウンド』だったのです。彼女を倒した桜井さんは、七人衆を敵に回してしまった」

事態が良く飲み込めない、というのが秀子の第一の感想だった。次に出てきたのが、だからなんだというのだ、というものだった。追突された車に、相手が悪いはずなのに『訴えてやる』と叫ばれた気分だ。そもそも、倒してやろうと堀田を倒したわけではない。完全に逆恨みもいいところだ。

「じゃあ、残りの六人が私を狙ってくると？　バカなんじゃないですか？　私は何も悪くないじゃないですか」

酒木原は流れ出る汗をハンカチで拭いた。言葉に詰まっているのだろう、と秀子は思った。

「何も悪くなくても、彼女たちが悪いと思ったから桜井さんを狙うのです。七人衆はメンツと名誉を何よりも大切にしていますから」

ひどい話だった。払ったら何とも言えない匂いをだすはた迷惑なカメムシに襲われたようなものだ。秀子自身は何も悪くないのに、よりによってこんな目に遭うとは。

「大体、酒木原さんのほうでなんとかならなかったんですか？」

「私はスタッフ部門のチーフです。七人衆に命令を下せるとすれば、スタッフ部門本部長の遠野氏くらいなものですからね……。とても私が口を挟めるようなものではありません」

酒木原は申し訳なさそうに、再び汗をハンカチで拭った。すでにハンカチはぐっしょりと濡れていた。あせっているのだろうか。

「幸いなことに、魔法少女の活動は通常任務以外に活動する場合は一時間と制限が決まっています。四六時中狙われ続けるわけではありません。彼女らにとってみれば、誰が上なのかを示す示威行為としての側面が強いでしょう。殺されることはないはずです」

酒木原の言葉は何の慰めにもなりはしなかった。当事者でないのだから、いい気なものだ。秀子自身は、この考えこそが身勝手にすぎるということも十分に理解していた。だが、それだけ何かに当り散らさないとやっていられない。こんなことは誰も得をしないのだ。

「それで、私はどうすればいいって言うんです？　まさかそれだけ伝えにきたって言うんじゃないですよね」

哀願に近い言葉だった。うつむいてしまった酒木原には、死刑宣告のように聞こえたかもしれない。
「すいません……私も何度も抗議しましたが、これぱかりは何もできそうにありませんでした……。出る杭は打たれる、などとは言いますがここまでとは思いませんでしたよ。自分が情けなくて……失礼」
酒木原にとっても、秀子と同じくらい頭にきている出来事らしかった。だが、いくら酒木原が怒ろうと、愚痴を吐こうと、当事者でないことはきまりきっているのだ。ここまで来てしまえば、秀子自身がなんとかするしかないという決まりは変わりそうになかった。
「こんな時で申し訳ありませんが、昼間送られたメールはもうチェック済みですね？　今度は間違いなく魔物が出てきます。退治のほうよろしくお願いします。……うまく退治できてから一時間。それだけ生き残ってください。正直言って、七人衆が何をしてくるか、私では及びがつきませんから……」
それだけいうと、酒木原はいつもよりゆっくりとその巨体を椅子から起こし、伝票をとった。
「おごりです。また会いましょう、桜井さん

第四話『大人』（前書き）

人は誰でも大人になりたがり、子供になりたがる。子供は未来に夢を見て、大人は過去に希望を見る。だが、それが何になる。子供でも大人でも、見なくてはならないのは現実以外に他ならない。次回、『大人』。たとえその現実が絶望で溢れていたとしても。

第四話『大人』

5

それから三日ほどは協会からの連絡はなく、金剛地以外の七人衆とやらも一向に現れる気配はなかった。平和であることは間違いなかったが、秀子にとっては苦痛だった。一度人に必要とされると、人間は何度も必要とされたいと願うものなのだ。それは秀子にも確実に当てはまった。職業人としての秀子は、いわゆる中間管理職だ。頼られることなどごまんとある。だがそれは、大半が秀子という人間そのものに期待されていることではなく、上司という役割に依存するものだ。秀子は自分という人間そのものに頼られたいという誰しも持つ欲に押しつぶされていた。

「桜井君」

課長の大川が見とがめたのか、呆れ顔で秀子を呼んだ。できるだけしゃきっとした顔にしようと努めるが、そうもいかないようだった。

「最近、勤務中にぼーっとしていることが多いようだが」

「はい。申し訳ありません」

「君は係長だ。下からの目もある。仕事に身が入らないのは困るな」

大川は話が分かる男性だった。秀子が係長になった時も、的確なフォローを入れてくれた。あまり人付き合いが得意でない秀子にとって、大川のように気遣いのできる上司の存在は心強い。

「悩み事があるなら遠慮なく言ってくれ。現在進めているプロジェクトのことであれば、なおさらだよ」

「大丈夫です。その、最近寝不足なもので」

嘘だった。むしろ魔物と戦うようになってからというもの、軽い運動になっているのか寝付きがよくなっている。大川は気持ち眉毛を上下させると、まあ何かあればきちんと言うように、と繰り返し

た。

酒木原と初めて会った喫茶店には、いつもどおりよぼよぼのマスターがひやひやする手つきでコップを磨いていた。最近は、酒木原とも会っていない。メールで事務的な連絡がくるくらいだ。秀子としては別にそれでも問題はなかった。むしろ、煩わしくなくていい。マスターに、コーヒーとフレンチトーストを注文する。平和だが、退屈な昼休みだ。その時、ドアベルが鳴った。客が入ってきたのだ。路地裏のひんやりとした風が吹き込んだ。秀子は、なんとなくそれが気に入らなかった。入ってくる人間まで、冷たいような気がしたのだった。

「いらっしゃい」

マスターがしゃがれた声であいさつをする。入ってきたのは、秀子より一回り以上年下の少女だった。顔つきはどちらかと言えば精悍なイメージだ。それなのになぜ年下と判断したかというと、セーラー服を着ているからだった。それだけならまだ良かったのだが、その上にフライトジャケットを羽織っているのだ。

「ここ、いいッスか」

少女は秀子の座っている目の前の席を指を差した。嫌な予感がした。席ならいくらでも余っている。客は秀子以外いない。それなのに、秀子の目の前に座るというのは、何か用があるに間違いなかった。

「……どなたです？」

少女は、ムスッとした顔をしている。ＹＥＳとは言っていないのに、勝手に席に座ってきた。テーブルに置いた携帯電話には、可愛らしいクマのマスコットがついていた。

「桜井秀子。間違いないッスか」

「……私の名前です」

「自分の名前は赤羽ッス。察しの通り、七人衆の一人ッス」

赤羽はよく通る声でオレンジジュースを注文すると、改めてこちらに向き直った。若い故にまっすぐな瞳だった。何が悪いわけでもないのに、秀子は視線をそらしてしまいそうになる。
「なんの御用ですか。魔法少女協会の規定時間はまだのはず。攻撃しに来たというわけではないでしょう？」
「その通りッス。自分はあんたを攻撃しに来たわけではないッス。かと言って敵意を持っていないというのも嘘になるッス」
「以前、金剛地さんという方にお会いしました」
一瞬、彼女のまっすぐな瞳が曇ったのを、秀子は見逃さなかった。別に観察力がずば抜けているわけではない。自分にないものを持つ少女に対する嫉妬のような物だ。憎んでいるものほどよく観察できる。
「彼女は、協会からの命令が不服なようでした。……あなたはそうではないようですが」
「……コンさん、いや金剛地さんはそんなことを言っていたッスか」
「ええ」
熱いコーヒーが喉を焼き尽くす。冷えた精神の秀子にとっては、それが生きている確認に感じられた。赤羽はどうだろうか。彼女の若い精神は、オレンジジュースが満たしてくれるのだろうか。
「コンさんは」
オレンジジュースの氷が揺れる。それは、何かが砕ける音に似ていた。もしかしたらそれは、秀子の運命が壊れた音だったのかもしれない。
「死にました」

「連絡を頂いたときは、何を考えているのかと思いましたの」
「考えてることは結構簡単だぜ。『お前をぶっ殺す』それだけさ」
使われていない夜の採掘場を、星と月のみが青白く照らしていた。

そこに立つ二人の女。一人は魔法少女『ダブルトリガー』の金剛地。もう一人は、同じく魔法少女『ホワイトデビル』花井。お互いすでに変身は完了しており、準備は万全だった。
「貴女、イカレていますの」
花井は侮蔑の視線を金剛地に送ってきていた。当然なことだろう。花井は組織に忠誠を誓っている。自分のような乱暴なはみ出し者は一生理解されないだろう。別にそれでも構わないのだ。どうせ、金剛地自身も花井のような忠犬は理解し得ない。お互い分かり合うことなど、出来はしないのだ。
「褒め言葉だぜ、お嬢さん」
両手を顔の前に持ってくると、勢い良く振る。袖から魔銃ベレッタＦ９２と魔銃グロッグが飛び出し、疾風の如く花井に光弾が飛び出していく。花井はと言えば、魔砲エクセリオンを自分の前方で回転させた。魔砲エクセリオンは本来はステッキであり、先に砲塔がくっついているというシンプルなデザインである。魔法少女のもつ武器は、その多くが魔力を放出するための媒介に過ぎないが、花井の場合それは顕著である。おそらく、彼女ほどの膨大な魔力の持ち主であれば、たとえ手で円を作るだけでも魔力を物理エネルギーに変換可能だろう。しかし、すべての魔法少女は、その変身後のコスチュームに組み込まれた魔力変換システムを通して、物理エネルギーへの変換を行なっている。花井の場合、自身の才能とともに、このシステムを通すことで、単純計算で二乗のエネルギーを放出することも可能なのだ。一方金剛地は、年齢的にベテランであるとはいえ、彼女ほどの才能はない。おそらく、先日戦ったあのルーキーよりも才能はないだろう。敵うわけがない。放った光弾が回転させたエクセリオンに弾かれながらそれを痛感する。
「どうしたんですの、一流。私に勝つのではありませんの？」
「言われなくても！」
金剛地が大地を蹴る。同時に、ブーツに仕込んだ宝玉にありったけの魔力をチャージし、一気に放出。加速。接近。魔銃グロッグの

銃身を持ち、モードを接近戦モードに変える。銃底からスパイクが飛び出し、殴る。エクセリオンが止める。弾く。
「くそったれ！」
花井がエクセリオンを振るう。だが、もともと接近戦に特化しているわけでもないので、守勢に回るほかない。魔銃グロッグを手の中で回転させ、トリガーを引くが、光弾は花井を逸れていった。エクセリオンが手首に打ち込まれていたのだった。激痛が走る。魔銃ベレッタが転がっているのが見えたが、次の瞬間再び激痛とともに見えなくなった。今度はエクセリオンが金剛地の顎を打ったのだ。金剛地は倒れる。視界に星が広がった。星空だけが金剛地の視界を支配していた。
「終わりですの」
エクセリオンの砲身が、またも金剛地を捉えていた。
「私もヤキが回ったもんだ。後輩に二回も油断を取るようじゃおしまいだぜ」
「私もそう思いますの。……貴女、分かっていますの？　度重なる協会への裏切り行為。そして私に大しての私的な戦闘行為。……七人衆の一人でベテランだからといって、もはや擁護は出来ませんの。それに」
「それに？」
「貴女はなぜ笑っていますの？」
金剛地は笑っていた。ふてぶてしく笑っていたのだ。今から、死ぬというのに、そのことを分かっているはずなのに、笑っていたのである。
「さあね。だが、少しおはなしをしようじゃないか。どうせ死ぬんだ」
「長くは待ちませんの」
「何、大したことはないさ。……遠野の野郎は何をしようとしてる？」
一瞬、花井の瞳が泳いだ。いくら大人ぶっていても、中身は九歳

の子供だ。大人に隠し事などできない。
「教える義理はありませんの」
「そうかい。……だがな。私は全部知ってる。おそらく協会は、お前を使い潰すだろう。……それでもいいのか、お嬢ちゃん」
「無論ですの。私は協会のために生きて、協会のために死ぬ。そのことに誇りを持っていますの。私から見れば、あなたのほうがわがままな『お嬢ちゃん』ですの」
「そうかい。なら話は終わりだ」
花井の指が、トリガーに近づく。嫌に時間がかかるような気がした。それは金剛地の脳が勘違いした結果か、花井のせいかは分からない。ようやくトリガーに指がかかるのを見て、金剛地は目を閉じた。
「……タバコ、吸い忘れた。くそったれ」

何でもない風を装うのがこんなにも難しいものか、と秀子は思った。コーヒーを口に運ぶ。ソーサーがかちかちと音を立てる。
「前代未聞ッス」
赤羽の言葉が詰まるのが秀子には良くわかった。
「コンさんが死ななきゃならないなんて、自分は、自分は信じられないッス」
赤羽はそのまっすぐな瞳から発する視線をテーブルに落とした。彼女と金剛地は、おそらく秀子以上の仲だったのだろう。こうして、きちんと感情を制御できているのが不思議なくらいだった。泣き叫んでいてもおかしくない。一晩酒を飲んだだけの秀子ですら、この世に金剛地がもう存在しないなどと、とても信じることができない。
「でも、事実なんス」
赤羽はバックから黒い塊を取り出す。それは、金剛地が使っていたものと思われる銃だった。彼女からこの銃で撃たれたのだから、よく覚えている。

「これを受け取って欲しいッス」
「これは？」
「魔銃ベレッタ……ここのマスター、大丈夫ッスか？　まさか聞いてるわけじゃないんスよね」
「大丈夫ですよ」
「話を戻すと、コイツはコンさんが使っていたモノッス。アンタは、銃を使うと聞いているッス。だから、アンタに持っていてもらいたいッス」
　金剛地は死んだ。つい何日か前に、彼女からこの銃で撃たれ、応戦し、一緒に酒を飲んだというのに。あの日握手した時の暖かく力強い手を持つ彼女は、もうこの世に存在しないのだ。
「……受け取れません」
「なんスって？」
「私には、恐らくそれを受け取る資格も、価値もありません」
「何を言ってるんスか」
「怖いんですよ。……死ぬのが怖いんです」
　そういうと、秀子は自分の手のひらをテーブルの上に差し出した。手のひらは汗でびっしょりと濡れていた。
「だいたい、その魔銃を受け取ったとして、私に何をしろというんです？　貴女達が私にしたように、誰かに報復をしろとでも？」
　赤羽はバツが悪そうに再び視線を落とした。分かっていた。秀子は今、余計な事を言い放っているということを。それが、赤羽を困らせているということを。そして、それが彼女に失望すら与えているということを。
「自分は……自分は別にそんなつもりじゃなかったッス。でも、アンタの言い分も最もッス」
　赤羽はまっすぐな瞳に失望の色を浮かべながら、立ち上がった。彼女がしたい話は、どうやら全て終わってしまったようだった。
「……今日した話は、協会にはオフレコにしてほしいッス。で、あんたはもうこの世界に関わらないほうがいいッス」

「……どうしてです」
「戦争が始まるッス。……今言えるのはそれだけッス」
カフェには暑いはずなのに冷たい空気が再び吹きこみ、秀子のもとにはコーヒーだけが残された。

仕事が終わると、秀子の足はいつか金剛地と共に酒を飲んだ、あのバーに向かっていた。相変わらず店には人が少なかった。平日の火曜日だったので、そのせいもあるのかもしれない。
「いらっしゃい」
マスターは笑顔であいさつをする。秀子は、あいさつをうまく返すことができなかった。彼は、金剛地の死を知っているのだろうか。それとも、客の死には興味など無いのだろうか。
「今日は金剛地さんは一緒でないのですね」
あまりにもタイミングがよかったので、秀子は少し面食らってしまった。それに、注文したはずのないあの時のカクテルが、すでにカウンターに置かれていた。
「最近、いらっしゃらないのですよ。いつもなら、仕事帰りに必ずといっていいほどこちらに寄られて飲んでいかれるのですがね」
名前も知らない落ち着いたジャズが、店の沈黙をかろうじて防いでいた。言葉が出てこない。涙も出てこない。それは、秀子が大人であることの証とともに、失ったものの多さを物語っていた。
「……いつか、また来ますよ、彼女」
「そうですか」
マスターは再び笑顔を浮かべ、グラスを拭き始めた。秀子にはそれがとてもありがたく思えた。かろうじてせき止めている感情が、一気に吹き出してしまいそうだったからだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7352y/

魔法係長桜井秀子

2011年12月11日18時50分発行